

演 題 名 排泄援助をすることでご利用者の笑顔を取り戻した事例

施 設 名 介護老人保健施設しおさい

発 表 者 関 邦 也

概 要

【はじめに】

頸髄症により、四肢麻痺出現。ベッド上で寝たきりの生活が主となり、介護依存が強くなってしまったご利用者が、寄り添ったチームケアを提供することで自らの意識の変化を促し、ADLの向上がみられたのでここに報告する。

【症例紹介】

N様 88歳 女性 要介護5
生活歴：60歳まで学校給食調理員として勤務。ご主人を亡くされたからはキーパーソンである長男家族の同敷地内で一人暮らし。その後も婦人会役員として地域貢献を続けていた。

性格：常にトップ意識が高く、ご家族の意見には耳を貸さず頑固。

既往歴：60歳 C4～C5 椎弓固定術
65歳 L4～L5 人工椎間板手術
85歳 頸髄症

平成24年12月自宅で転倒し、体動困難、左優位の四肢麻痺出現。MRIで脊柱管狭窄からC3～C5、C6～C7レベルの高度脊柱への圧迫があり、頸髄症と診断される。高齢のため手術適応は無く、鎮痛剤、睡眠導入剤を処方されベッド上で寝たきりの生活となる。在宅生活は介護が困難のため、転院を繰り返した後、平成25年5月に当施設に入所となる。

【治療（ケア）計画】

- 1、食堂に行き、食事自力摂取ができる
- 2、自力での排便が行え、満足いく排泄ができる

【経過】

会話好きであり、経歴からプライドが高く持っているため、指示されることは嫌いで、自身の思うように全てが運ばれなければ不満や身体的苦痛として訴えが増える傾向であった。リハビリについてはベッド上でのROM、ストレッチ等他動的リハを好み、座位訓練や車椅子乗車については短時間で中止を希望し、集団体操などの参加も拒否されることが度々あった。傾聴と励まし、目標を伝えることを根気強く続けることにより、食堂に行き自助具を使用しながら食事摂取自立となる。コミュニケーションが取れていく中、その頃より排便に対しての訴えが聞かれるようになった。四肢麻痺になってからの排便は、昼夜オムツを使用し定時に下着交換を行っていたが

自力排便はなく、毎日腹部不快と排便困難の訴えが聞かれた。その度、看護師が摘便で対応していた。ご利用者は毎回摘便依頼することに対して「申し訳ない。私もできることなら自分の力で便を出したけど・・・」との要望が聞かれたことにより、何とかご利用者の要望を叶えさせることはできないかと考えた。チームでカンファレンスを行い日常生活の見直しを行った。介護士はできる限り離床時間を増やせるように声掛けや集団体操への参加を促した。看護師はベッド上、自らで行える腹部マッサージをご利用者に覚えていただけるように一緒に練習した。覚えていただいた後は訪室度に声掛けした。リハビリはインナーマッスルの強化、腹横筋の訓練に加えて、便意があるときなど息むことができるように指導した。栄養士は普段の食事摂取を考え、汁物は残さず摂取していただけることから食物繊維の強化食品を混ぜて提供した。

【結果】

朝の定期訪室に伺いお声掛けすると「昨日は3時に自分で便を出すことができました。夜にも1度便がありました。」と笑みを浮かべ満足そうに報告すると同時に「やっぱり、自分で頑張ることは大切だからこれからも練習を続けるよ。」と前向きな発言も聞かれた。今までのケア依存を考えるとその発言は職員として驚きであった。

【考察】

入所時には全てのことにに対して依存心の強いご利用者に対し、寄り添いながら自立支援を考えたケアを提供することでご利用者の意識は変化し、自らが「まだ自律した生活が送れる。」との気持ちになっていただくことができた。目標達成するためには各々の職種の連携が不可欠であり、ご利用者のニーズを都度確認していく必要がある。全てをやってあげるのが優しさではなく、自身ができる喜びを感じられるケアを提供することが重要で、今回のケースは自己達成が可能になったことで、もっとも生きがいを感じていただけたと考える。